

リベラルアーツ教育を知るための最新図書 20 冊

—中部大学 CLACE 蔵書から文献案内—

鈴木 順子

Latest 20 Books on Liberal Arts Education : Good Book Guide from Chubu University CLACE Collection

Junko SUZUKI

The Creative Liberal Arts Center has created the CLACE collection and is beginning to have books related to the liberal arts. From them, we will select and introduce the latest 20 books deemed especially helpful when conducting liberal arts classes.

Keywords : Liberal Arts, Discussion, Purpose of Liberal Arts Education, History of Liberal Arts, Active Learning

1. はじめに

中部大が 2021 年 4 月に創造的リベラルアーツセンター (CLACE) を発足させて 1 年が経とうとしている。この 1 年の主な活動を振り返ってみると、パイロット授業の展開、5 月のシンポジウム開催などが挙げられるが、日常的な活動の 1 つに、リベラルアーツ関係の書籍をリストアップして検討、適切なものを購入し、CLACE 蔵書を作り始めたことが挙げられる。

筆者はこの半年間、選書担当者として現在入手可能な数多くのリベラルアーツ関連の本に目を通す機会を得た。この作業を通じて気づいたことは、目下「リベラルアーツ」の語をタイトルに含む本は数多く流通しているが、内容の質にはかなりばらつきがあり、玉石混交だということである。リベラルアーツ教育に関心を持ち、リベラルアーツの授業を実践してみようと考えた方が、手始めに何を読めばよいかと探した際に、おそらく多くはどれから手に取ればよいか戸惑うのではないか。そうした際の参考になればと思い、選書の経験を生かしてリベラルアーツ関連最新図書の文献案内を行うことにした。

紹介の順番は次のようになる。はじめに、「リベラルアーツ教育の先駆的の大学に学ぶ」として、東工大、ICU、東大、桜美林大といった、現在リベラルアーツ教育をリードする大学において授業を実践している教員が書いた本を紹介する。次に、「各分野におけるリベラルアーツ教

育の先駆者に学ぶ」の章では、倫理学、物理学、音楽学、法学などの専門家が、自分の分野からリベラルアーツについて述べた本を見る。最後に、「授業手法のエキスパートに学ぶ」と題した章では、リベラルアーツの授業を展開する際に役に立つであろう手法や評価の仕方について書かれた、教育学の専門家による書籍を紹介する。

2. リベラルアーツ教育の先駆的の大学に学ぶ

リベラルアーツ教育に取り組んでいる先駆的の大学はいくつかあるが、中でも東京工業大学、国際基督教大学（ICU）、東京大学教養学部、桜美林大学は、リベラルアーツ関連図書の出版にも力を入れ、それらが揃って良書である点で出色の存在である。それぞれの大学のリベラルアーツ教育をめぐる理念や、実践の様子が手に取るように伝わる書籍を取り上げる。

1) 東京工業大学

- ① 池上彰、上田紀行、伊藤亜紗『とがったリーダーを育てる 東工大「リベラルアーツ教育」10年の軌跡』中公新書ラクレ、2021年（図1）
- ② 上田紀行編著『新・大学では何を学ぶか』岩波ジュニア新書、2020年
- ③ 桑子敏雄『何のための「教養」か』ちくまプリマー新書、2019年



図1 『とがったリーダーを育てる 東工大「リベラルアーツ教育」10年の軌跡』

東工大は、2011年にリベラルアーツセンター（2016年以降、リベラルアーツ研究教育院）を発足させ、今年10年の節目を迎えた。「日本のリーダーにもっと理系の人材を」という使命感のもと、60名ほどの教員がリベラルアーツ教育に携わっている。

①『とがったリーダーを育てる』を読むと、言葉のちからで指導力を発揮できる理系人間を輩出させる、という教員らの強い情熱が伝わってくる。複雑な21世紀的社会課題に対応でき、多様な考え方を持つ人々の先頭に立って、理系の専門知と市民的倫理感の両方を兼ね備えた人間を育てたいという、使命感である。そのためには、どうしてもリベラルアーツの教育が必要だという信念。このような志を持った教員が集まって始まった教育改革プロジェクト推進が、東工大のこの10年だったことがわかる。「教育とは情熱」以外の何ものでもないと思わされる。第3章にはその情熱と志で、学内の反対をどのように乗り越えたかも描かれている。中部大学は総合大学ではあるが、この理系学生にリベラルアーツ教育を施す意味が深く掘り下げられて書かれている点は、特に参考になるだろう。また、「とがった」人間を生み出すには、何

より教員と学生、学生同士の「信頼」からとの指摘は貴重である（伊藤亜紗氏）。私たちは学生を本当に信頼して授業を展開しているだろうか、と自問させられた。

②では、その情熱と志を共にする教員らが、それぞれの考えるリベラルアーツ教育について書いている。たとえば、弓山達也氏は、「（オンライン授業も可能な中）何のために教室に行くのか」という問いを立てたところ、ある学生が「（教室では）先生がしたいことではなく、隣に座っている人が何を考えているか知りたい」と答えたエピソードを紹介する（「なぜ大学で学ぶのか、一緒に考えよう」）。対面のリベラルアーツの授業にあっては、リベラルアーツ教育でしかできないこと、つまり学生主体の共同の学びをこそ提供しなければならないと肝に銘じさせられる。

③の桑子敏雄氏は、東工大におけるリベラルアーツ教育の土台を作ったとも言える初代センター長。「人間としての根っこを太くする」のがリベラルアーツ教育、というその理念と、さらに授業実践記録とが綴られている。

2) 国際基督教大学 (ICU)

④ 伊東辰彦、森島泰則共編著『リベラルアーツという波動 答えのない世界に立ち向かう 国際基督教大学の挑戦』学研プラス、2019年 (図2)

⑤ 大口邦雄『リベラルアーツとは何か』さんこう社、2014、2020年

⑥ 絹川正吉『リベラルアーツの源泉を求めて』東信堂、2018年



図2 『リベラルアーツという波動 答えのない世界に立ち向かう 国際基督教大学の挑戦』

1952年の建学以来、教養教育を標榜してきたICUは、いわばリベラルアーツ教育界の老舗とでもいべき存在であるが、④を読んでみると、その存在感の源は、常にリベラルアーツ教育の内容・手法をアップデートしていく、時代への適応力であることがわかる。他方、一貫して変わらないのは、世界平和のために尽力する人材をいかにして輩出するかという、やはり教育的情熱である。

1章には、21世紀のあるべきリベラルアーツ教育が述べられているが、その内容は、東工大や東大、中部大が抱く危機感、使命感とほぼ同じであることに気づかされる。老舗にあっても、新興にあっても、現在リベラルアーツ教育に良心的に取り組んでいる大学においては、同じ問題意識が共有されている点は非常に興味深いので、ぜひ読み比べていただきたい。

音楽を用いたリベラルアーツ授業の実例のみならず、さらに一步進んで、学生にリベラルアーツ教育の意義について書かせているレポート学習例などもあり、参考になる。また、世界の大学におけるリベラルアーツ教育も紹介されている。

⑤と⑥は、それぞれ学長経験者の数学者二人が、リベラルアーツを歴史的に遡りつつ、今何をすべきかを語っている。学長経験者がこのようなリベラルアーツについての深い知識と洞察、使命感と情熱を持っていることを知ると、ICUが行うリベラルアーツ教育の厚みが容易に想像できる。特に⑤のリベラルアーツの歴史についての著述は詳細かつ包括的であり、圧巻としか言いようがない。

3) 東京大学教養学部

⑦ 石井洋二郎・藤垣裕子『大人になるためのリベラルアーツ 思考演習 12 題』、東京大学出版会、2016 年 (図 3)

⑧ 石井洋二郎・藤垣裕子『続・大人になるためのリベラルアーツ 思考演習 12 題』、東京大学出版会、2019 年



図 3 『大人になるためのリベラルアーツ 思考演習 12 題』

1949 年にはじまる東京大学教養学部における教養教育こそ、日本において最も歴史が古い
が、⑦⑧の著者である石井・藤垣両氏が 2015 年から行ってきた授業形式、すなわち、答えのない問いを扱い、終始ディスカッションで進めていく授業というのは、実は東大内でも革新的な試みであった。その授業ライブが⑦⑧の 2 冊には詰まっている。

学生同士、学生と教員、時に教員同士が織りなす議論を読んでいるうちに感じられてくる知的興奮は、確かに、東大のような場でしかできないことかもしれないと思うが（ハーバード大でサンデル教授がしていた授業を彷彿とさせる）、しかしこの充実感を生む最も大きな原因は、学生の側の知識量というよりも、学生が持つ「自分の言葉を相手に伝えたい、理解させたい」という意気込みを教員がうまく引き出せていることではないかと思われる。

ディスカッション授業はディベート授業とは異なり、勝ち負けを競わせることは決してないが、しかし教室内において「正義は一つ」でもなければ「みんな意見が違ってそれでいい」でもない、そのどちらにも終わらせないところが鍵になる。自分と異なる意見の人と議論をすることで、自分や相手が変わったり深まったりすることをよかったと思える態度を引き出した
り、一層涵養したりすることが、何よりリベラルアーツ授業に携わるものとしては必要であることを感じさせられる。

また、2 人チームで教員が授業を行うことの大事さも、この 2 冊から学んだ。

4) 桜美林大学

⑨ 芳沢光雄『リベラルアーツの学び 理系的思考のすすめ』岩波ジュニア新書、2018年

桜美林大学も、リベラルアーツに力を入れている大学である。2007年以降リベラルアーツ学群を有し、芳沢光雄氏はその中であって、数学でリベラルアーツ教育を導入してきた。専門科目をやさしくしただけのリベラルアーツ授業になってはならないと奮闘した、その工夫が語られる。冒頭部分におけるリベラルアーツの語源や歴史の説明は（大口氏の⑤や、⑦⑧⑩の石井氏による「グローバル化時代のリベラルアーツ」（東京大学教養学部報 561号、2013年）を参考にしたとあるが）、手短でわかりやすい。「文系・理系を問わず幅広い分野の専任教員が繋がり合って所属し、垣根を越えて融合した教育・研究を進めている」のは、リベラルアーツ教育を標榜する大学の中でも数大学だけであるとし、「一部の分野だけに偏った専任教員だけが配置されていたり、学生も一部分野だけの学びしかできなかつたりする状況」ではリベラルアーツ教育とは言えないとして、流行を追った、名前だけリベラルアーツを冠する、リベラルアーツもどきの大学教育を批判している。

参考) 中部大学

⑩ 石井洋二郎編、藤垣裕子・國分功一郎・隠岐さや香執筆『21世紀のリベラルアーツ』水声社、2020年 (図4)

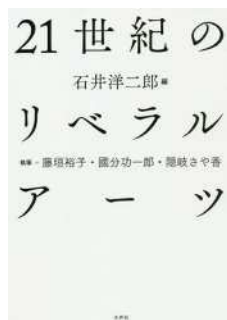


図4 『21世紀のリベラルアーツ』

2020年12月、CLACE発足に向けてワーキンググループによる準備が進んでいた頃、早々に初めての書籍として刊行され、以後のCLACEの方向性を示し得た大切な一冊。2019年末に中部大学で行われた「21世紀のリベラルアーツ」シンポジウムの記録に加え、各パネリストが論文を書き直して寄稿したものを収録している。中部大学としてどのようなリベラルアーツ教育を目指すのかが、冒頭の「創造的リベラルアーツに向けて」で明示されている。例えば、「4つの限界から自由になるため」に「学ぶ態度としてのリベラルアーツ」を身につけることに他ならない、といった考え方である。それはこれまでの知識量を増やす教養教育とは異なる、21世紀的な新しいリベラルアーツ教育である。

CLACEが今後もこうしたシンポジウムを開いたり、また所属教員が執筆し、書籍にして出版したりして、常に理念を確認し、折に触れて実践内容と姿勢とを社会に発信していくことの大事さを感じさせられる。他大学の動向を追いつつ、中部大学独自の学生の特徴、地域性、求められる卒業生像に応じて、特徴あるリベラルアーツ教育を推進している態度を社会に示していくことは今後も大きな意義があると思われる。

3. 各分野におけるリベラルアーツ教育の先駆者に学ぶ

前章では、リベラルアーツ教育に力を入れている大学ごとに出版物を見ていったが、この章では、各学問分野の専門家が、それぞれの立場（政治哲学・倫理学、物理学、音楽学、論理学、法学）からリベラルアーツを語っている書籍を紹介する。

1) 政治哲学・倫理学

⑪ マイケル・サンデル『ハーバード白熱教室 世界の人たちと正義の話をしよう+東北大特別授業』NHK白熱教室制作チーム訳、早川書房、2013年（図5）

⑫ マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう いまを生き延びるための哲学』鬼澤忍訳、早川書房、2010年

⑬ ジュリアン・バジニ『100の思考実験』向井和美訳、紀伊國屋書店、[2012]2020年



図5 『ハーバード白熱教室 世界の人たちと正義の話をしよう+東北大特別授業』

マイケル・サンデル氏の行うディスカッション授業に関する書籍は多数あり、どれも興味深い。今回紹介する⑪は、いつものハーバード大の学生ではない、世界各地（インドのジャイプル、北京、ソウル、日本の東北地方など）の一般市民らを相手に行われた授業である点に特徴がある。参加者の知識量や、民主主義の浸透度に左右されずに行われる、彼の授業運営の素晴らしさがより伝わる一冊である。

結局、彼のディスカッション授業の進め方において何がもっとも重要で、また何が最も難しいところだろうか。それは1) 最後に結論が出ないことをよしとする勇気。ディスカッションできたことを純粋に喜ぶ姿勢。2) 少数意見を述べた人を、それがどんな意見であれ心から称える勇気を持つこと。この2点ではないだろうか。彼が、東北の人々と復興が進まない理由をディスカッションしている様子、ジャイプルの人々と、ニューデリーにおけるレイプ殺人事件の直後にインドの女性差別とフェミニズムについてディスカッションしている様子に心熱くならない人はいないだろう。タブーなき討論、少数意見の登場にも決して逃げたり否定したりせず、常に参加者同士を互いに議論させようとする姿勢、これらが授業運営者として大切であることが伝わる。

サンデル氏自身の哲学・倫理学を知りたいければ⑫に展開されている。これらの熟考された思想を、彼は授業で決して学生らに押し付けず、自分と明らかに対立する意見も懐深く織り込みながら、議論をリードしていく。彼のディスカッション授業中の発言、彼の声は、正義のモノローグではなく、すでに背後に多くの声を包含するポリフォニーである。だからこそ、授業参

加者たちはその包容力に安心、信頼し、発言できるのだ。（「ポリフォニー」の大事さについては、①4章における伊藤亜紗氏の発言を参照のこと。）

⑬からは、具体的な倫理的・哲学的ディスカッション課題が豊富に得られ、授業の際のテーマ設定に参考になる。他方、これほど多くの、答えが定まらない現代的問いを（例えば「どうすれば異文化を尊重できるか?」「宗教なしの道徳は成立するか?」「コンピュータに政治ができるか?」など）常に引き受けつづけるリベラルアーツ授業の本来的かつ独特の重さに改めて気づかされる。リベラルアーツとは、授業において正答が出ないことに耐える勇気であると改めて気づく。

2) 物理学

⑭ 大栗博司『探求する精神 職業としての基礎科学』幻冬舎新書、2021年（図6）



図6 『探求する精神 職業としての基礎科学』

⑭『探求する精神』の大栗博司氏は、東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構の長をはじめ、カリフォルニア工科大学教授やパーク研究所長などを兼務する、日本が世界に誇る物理学者の一人である。また、日米の各組織で発揮するリーダーシップや、一般向けの書籍のわかりやすさなど、どの点を取ってみても日本が誇るべき現代の理想的なリベラルアーツの知の巨人であるといえよう。彼が、専門知のみならず、広く深い人文知をどのように培ってきたか、謙虚かつユーモアあふれる語り口で語る自伝である。

中でも特に興味深いのは、日米両方の組織で発揮されているリーダーとしての言語能力を、大栗氏はどのように身に付けたのかという点である。英語について彼は、大学院まで日本育ちの自分が、もっとやっておけばよかったこととして、会話ではなく読解を挙げる。また、アメリカでは、国語教育において書いたり議論したりする力をきちんと養成しているため、理系研究者も例外なく見事に人に伝わる言葉が使えるが、日本の研究者が日本語でそれをできているかは心もとないとする。したがって、彼は日本においては英語教育より、もっと論理的な日本語を使えるようにする国語教育が大事（文学偏重の内容にも一言を呈している）だと述べる。理系のグローバルリーダーからのこうした提言は印象に残り説得力がある。

このような人物が一人でも多く日本から生まれることが、リベラルアーツ教育の目標であると言って過言ではないだろう。実は大栗氏は、2022年6月に予定されている、次回の中部大学CLACEシンポジウムでパネリストとして登壇して下さることが決まっており、どんな話が聞けるのか今から楽しみである。

3) 芸術学

- ⑮ 菅野恵理子『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる 21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』アルテスパブリッシング、[2015]2019年 (図7)



図7 『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる 21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』

ハーバードに限らず、アメリカの多くの大学がなぜ音楽科をおいているか。実技だけではなく、鑑賞や批評、そして社会と音楽について言葉で深く語り合う教育をなぜ行っているのだろうか。その答えが得られる本。音楽のリベラルアーツとしての歴史や、どのように音楽をリベラルアーツ授業のテーマにするかなど、歴史解説と具体例もとても盛り沢山で学ぶところの多い本。音楽をリベラルアーツ授業で教える際には必読の書と思われる。

4) 論理学

- ⑯ 野矢茂樹監修、NHK制作班著『「ロンリ」の授業 論理的ってこういうことだったのか!』三笠書房、2019年 (図8)



図8 『「ロンリ」の授業 論理的ってこういうことだったのか!』

ディスカッション授業を行う際にまず認識すべきは、意見の対立は、人と人との（感情的）対立とは異なるということである。また、多様な意見が出た際に「考えは人それぞれ」で終わってしまってもいけない。お互いの意見を尊重しながら、どうしたら言葉を使って歩み寄り、合意点を見つけられるか。この本は、そこまで授業で目指すことの大事さと、その実現のための手法を示してくれる。「意見の違いを受け入れつつ、違いを解消しようとする事」、「意見の違いを尊重しながら、人として繋がろうとする事」、これらの相反するよう見える二つの態度を両立させる鍵は、この本によれば「論理性」である。実りあるディスカッション授業を目指す際のヒントが与えられる。

5) 法学

- ⑰ 瀬木比呂志 『リベラルアーツの学び方』 ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年 (図9)



図9 『リベラルアーツの学び方』

裁判官出身の法学者である著者が、リベラルアーツについて語り尽くした本。教える立場からというよりは、自学自習する場合に役立つ本である。本の後半は、リベラルアーツとして親しんでおくべき作品リスト群になっている。理系の本や哲学書に始まり、SF小説、映画、漫画まで網羅している。21世紀の教養はこれらの分野にも及んでいることが実感でき、リベラルアーツ教育に携わるものとしては自分がどのあたりの知識を補強しておけば良いか参考になる。

4. 授業手法のエキスパートに学ぶ

この章では、リベラルアーツ授業を行う際の具体的な授業の進め方や、評価の仕方などの参考になりそうな教育学関連の書籍をいくつか紹介する。

1) 討論授業、ルーブリック、ピアレビュー

- ⑱ アンブローズ、ブリッジズ、ディピエトロ、ラベット、ノーマン著『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』栗田佳代子訳、玉川大学出版部、2014年

中部大学におけるリベラルアーツの授業で、どのように評価を行うかについては、目下のところは教員それぞれに任されている。レポートだけを評価対象にする場合もあれば、授業中の発言内容まで考慮する場合もあるだろう。後者の場合、どうすれば適切な評価を下せるだろうか。公平さを重んじる教員ほど悩むことになる。そんなとき、⑱『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』(図10)には、「ルーブリック」「ピアレビュー」を生かす方法が示されており、参考になる。



図10 『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』

その他、「レポート添削に膨大な時間がかかるが、学生の書く力がアップしない場合どうしたらいいか」といった具体的な教員の悩みに対する、教育手法の専門家からのアドバイスは、パフォーマンス評価が必須のリベラルアーツ教育に携わる教員であれば一読しておくに役立つだろう。

2) アクティブ・ラーニング、ICT利用

⑬ 松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年

⑭ 篠原正典・宮寺晃夫編著『新しい教育の方法と技術』ミネルヴァ書房、2012年

2012年の中央教育審議会の答申で「アクティブ・ラーニング」は、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」とされた。その目的は、「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成」であり、具体的方法の中に、「教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等」が挙げられたのだった。これを読むと、ディスカッションを含むアクティブ・ラーニング全体がリベラルアーツ教育を実現する際にとっても親和性が高く、効果的な方法に見えることは明らかだろう。ただどのようにリベラルアーツ教育にアクティブ・ラーニングを取り入れていくのかは、手探りの状態である。これらの本を読むことで、リベラルアーツ教育に携わる教員が、自分に可能な手法を無理のない範囲で取り入れていくことが目下の最良策と思われる。

また、今後リベラルアーツの授業においては、教室における対面の授業運営と並行して、ICTを効果的に利用した授業方法も考えていく必要がある。⑭は、2011年から導入された新学習指導要領にのっとってどのように小中高での教育が変わったか（「ゆとり教育」から「主体的学習」へ、「学ぶことの意味を教える教育」へ）を伝えてくれ、その中でICTを含む先取的取り組みがどのようにおこなわれつつあるかを教えてくれる。2022年現在大学生である人々が、この10年間小中高でどのような教育を受けてきたかを知ることにより、大学でのリベラルアーツ教育が彼らにどのように受け止められるかを想像する際に大いに参考になる。

5. おわりに

本稿では、今年誕生したCLACE蔵書の中から、リベラルアーツ教育に携わる際に参考になる本を、先駆的な大学の出版物、各分野の専門家の著書、そして授業手法に関する本、の三つに分けて紹介してきた。紹介した良書に少なからず共通してみられる内容・特徴をまとめると、

1)新しい教育を行おうという情熱が感じられること、2)大学ごとの独自性を意識していることが挙げられる。また、ディスカッション授業については、3)答えが出ないことに耐え、議論できたことだけを喜ぶ、少数意見を受け入れる度量をもつ、などが教師の側において重要であり、また4)教師よりも学生が主体であること、学生を信頼すること、が大事であるとする指摘も複数見受けられた。また5)その信頼を生じさせるのは、指導側が多声で語りかけているかどうか大事だ、という記述もあった。ディスカッションを取り入れたリベラルアーツの授業の最終目標としては、6)参加者が、互いの意見の違いを受け入れつつ歩み寄れるかどうか、違う意見の人ともつながろうとできるか、を目指すべきことを学んだ。

もし、リベラルアーツ教育の現状について調べる必要が生じたり、授業において何を目標せばよいか迷ったときなどには、本稿を参考にいただき、参照すべき本を探していただければと思う。ここで触れた本はほぼすべて、20号館6階の創造的リベラルアーツセンター室に所蔵・配置されており、学内者には貸出可能である。今後もCLACE予算の範囲内で毎年蔵書は充実を図っていく予定であり、継続的に最新のリベラルアーツ関係の書誌情報を報告、共有できたらと考えている。もしお気づきの良書があればご教示いただければ幸いである。

参考文献

(本稿で取り上げた書籍一覧。太字はリベラルアーツの授業を行うにあたって特に参考になるもの)

- ① 池上彰、上田紀行、伊藤亜紗『とがったリーダーを育てる 東工大「リベラルアーツ教育」10年の軌跡』中公新書ラクレ、2021年
- ② 上田紀行編著『新・大学では何を学ぶか』岩波ジュニア新書、2020年
- ③ 桑子敏雄『何のための「教養」か』ちくまプリマー新書、2019年
- ④ 伊東辰彦、森島泰則共編著『リベラルアーツという波動 答えのない世界に立ち向かう 国際基督教大学の挑戦』学研プラス、2019年
- ⑤ 大口邦雄『リベラルアーツとは何か』さんこう社、[2014]2020年
- ⑥ 絹川正吉『リベラルアーツの源泉を求めて』東信堂、2018年
- ⑦ 石井洋二郎・藤垣裕子『大人になるためのリベラルアーツ 思考演習12題』、東京大学出版会、2016年
- ⑧ 石井洋二郎・藤垣裕子『続・大人になるためのリベラルアーツ 思考演習12題』、東京大学出版会、2019年
- ⑨ 芳沢光雄『リベラルアーツの学び 理系的思考のすすめ』岩波ジュニア新書、2018年
- ⑩ 石井洋二郎編、藤垣裕子・國分功一郎・隠岐さや香執筆『21世紀のリベラルアーツ』水声社、2020年
- ⑪ マイケル・サンデル『ハーバード白熱教室 世界の人たちと正義の話をしよう+東北大特別授業』NHK白熱教室制作チーム訳、早川書房、2013年

- ⑫ マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をして 今を生き延びるための哲学』鬼澤忍訳、早川書房、2010年
- ⑬ ジュリアン・バジーニ『100の思考実験』向井和美訳、紀伊國屋書店、[2012]2020年
- ⑭ 大栗博司『探求する精神 職業としての基礎科学』幻冬舎新書、2021年
- ⑮ 菅野恵理子『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる 21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』アルテスパブリッシング、[2015]2019年
- ⑯ 野矢茂樹監修、NHK制作班著『「ロンリ」の授業 論理的ってこういうことだったのか!』三笠書房、2019年
- ⑰ 瀬木比呂志『リベラルアーツの学び方』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年
- ⑱ アンブローズ、ブリッジズ、ディピエトロ、ラベット、ノーマン『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』栗田佳代子訳、玉川大学出版部、2014年
- ⑲ 松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年
- ⑳ 篠原正典・宮寺晃夫編著『新しい教育の方法と技術』ミネルヴァ書房、[2012]2013年